
~ v e r 銀 ~ 命に変えても

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ver銀命に変えても

【Nコード】

N3851P

【作者名】

時雨

【あらすじ】

「ラディスラス様。お食事です。」
「お前の作ったものなど食えるか。修行をして出直せ。」
「修行って…どこで学べるんですか？」
「…学の無いお前を雇った私が馬鹿だった…」
「そんな！あなたは馬鹿ではありません！責めるなら僕を…」
「もういい！黙ってる。」

ラデイスラス♀Ⅱブレインの主。

×

銀^{しろがね}♂Ⅱラデイスラスに拾われた変態男

銀はラデイスラスに想いを伝えることが出来るのか？
ラブストーリーではありません。

命に変えてもついてきなさい宣言？（前書き）

漆黒に輝く黒髪を風に遊ばせ、貴方は僕の前に現れた。
悪魔が舞い降りたとその黒い瞳を見て僕は思った。

命に変えてもついてきなさい宣言？

凍え死ぬかと思った。

俯き力の入らない身体を抱きしめる。

ガチガチと歯を鳴らし、僕は不意に顔をあげた。

そこには真っ白な服を真っ赤に染めた幼き少女の姿。

闇に染まった真っ黒な髪と、意思の強そうな黒い瞳を僕に向け少女は呟いた。

「お前、天使？」

第一声が驚きの言葉で僕は思わず噴出しそうになるが、体力の限界でそんな力は無かった。

「…どうしてそう思うの？」

僕は少女を見つめた。

少女は真っ黒で、服だけ真っ赤で悪魔のようだ。

「目も肌も髪も真っ白だ。」

そういわれ俯いてしまう。

僕にとって色素の薄い白い髪も、白い瞳もコンプレックス以外の何者でもないのだから。

隠してしまいたい衝動に駆られる。

「…雪とどうかしてる。羨ましい。」

女の笑顔がこれほど奇麗だと感じたことは無い。

気がつけば少女に手を伸ばしていた。

触れることをためらい静止した手を見つめ、僕は顔を真っ赤に染める。

「おまえ。名前は？」

少女は制止したままの手を見つめ、僕を見下ろした。

「銀。しろがね キミは？」

少女は一瞬ためらったのか、言葉を飲み込んだ。

「なんだ。人間か。せつかく綺麗だったのに。」
なんていった？

”人間”であることに幻滅された？

「え、と？キミは人間じゃないの？」

そう聞き返すと恐ろしいほど鋭い瞳で睨まれた。

「汚らわしい人間の分際で私に質問するな。」

先ほどの悪魔と言う表現は間違っていないようだった。

真っ黒な目が恐ろしい。まるで別の生き物のようにみえる。

何故睨まれる？僕は寒さで震える手を急いで引っ込めた。

「行き場もないようだし…」

仕方ない。私が雇ってやる。宿付き。三色食事つきだ。拒否権は無い。」

ビシリと言い捨てられ僕は呆然とした。

「え？だってキミ僕より歳下じゃないの？」

どうみても少女は幼く、僕より年下に見えた。

「だから？年齢なんてどうだっていい。」

大切なのは…学！」

頭いい奴が一番？

学のない僕はこうして彼女についていく事になったんだ。

奉仕編（前書き）

この小説はボーイズラブなど性的描写があります。
苦手な方はお帰りください。

ボーイズラブ 性的描写 グロテスクな描写
ガールズラブ 含みます。

奉仕編

寒い冬の夜。

雪景色など見ている余裕が無い程に寒い夜だった。

「しろ。」

隣を歩く僕に母親は微笑んだ。

シロと言う不名誉な名前はあだ名と言う奴だ。

「なに？」

両手をこすり息を吐く僕に母親は満面の笑みを浮かべた。

「寒い？」

「うん。」

「歩きたくない？」

「うん？」

途中から何かがおかしかった。

母親がこんな深夜に買い物に付き合えと言う理由も、突然にこんなことを言い出した理由も。

僕にはわからない。

「だったら、もう歩かなくてもいいよ。」

母親は今まで一度も見た事がないほど奇麗な笑みで僕の頭を撫でた。

「今日車なの？」

母親は笑顔で首を振りその場でしゃがみ込むよう僕に命じた。

「待ってるのよ？絶対、ぜーたい付いてきてはダメ。

わかった？」

「…分かった。」

正直理解など出来なかった。

寒いといったのに。何故歩かない？

「じゃあね。」

僕に背をむけた母親は全速力で走っていった。

「ま…つて…」

行き場の無い手を見つめ、僕は俯いた。
もしかして…捨てられた？

この歳で？

あり得ない。

帰ってくるだろう…多分。

僕は聖夜に降る雪を見上げ、溜息をついた。

嗚呼…クリスマスなど無くなればいいのに。

どうしてプレゼントを貰う日に捨てられるんだ？

何故失う？意味不明だ。

誰か説明を…

命に変えても守りたい者（前書き）

闇は永遠に続くものではなく、いつか終わるものなのです。
それを是非我が主に伝えたい。

命に変えても守りたい者

「銀。ローズ様居る？」

燕尾服を着た青年は僕の居る部屋に入ってきた。

僕の部屋は誰でも入っていいとされているから、昼夜とわず勝手に人が入ってくる。

「…ラディスラス様は只今会議中です。」

僕がそういうと、先ほどまで僕の生い立ちを聞かされていた少年三人が振り向いた。

「あれ？ウォルトもここに居たの？」

燕尾服を着た青年の後ろに居た、黄色い瞳をした青年はひょっこりと顔を出した。

「うん。ヘティーも交ざる？」

先ほどまで僕の話に興味深く聞いていた白い髪の少年ウォルトは、扉の前で立ち尽くす黄色い瞳の青年ヘティーの手を引いた。

「シロちゃん。ヘティーも混ぜていい？」

僕に決定権など無いから無言の了承とすると、ヘティーが困り顔で僕の前で正座をした。

「あれ？スウィジンもいたの？」

ヘティーは隣に座って僕の話待つ青年を見た。

「失礼だぞヘティー」

ウォルトに叱られヘティーが苦笑する。

「仕方ないだろ？シロがどうしてもって言うんだから。」

恐ろしく酷い言い方で少年はそっぽを向いた。

彼の名前はスウィジン。とても言いにくい名前だ。

「…銀がそんなことを？」

燕尾服の男は僕を睨んだ。

誰かに願いを聞き入れてもらえない立場の僕はブンブンと首をふる。

「キヤハハハハ。」

「アゼル！」

その光景を見て笑った瞳の金色をした少年を見つけ、燕尾服の男は声を荒げた。

「ずっとここに？」

「うん。居たぜ？な？シロ。」

スウィジンが火にガソリンを注ぐ。

燕尾服の男マリエルは、弟のアゼル無では生きられないと言っ程の依存ぶり。

正直巻き込まれる僕は迷惑。

「さあ、アゼル。立って。部屋に帰りますよ。」

僕にアゼルを取られたと思ったのか、マリエルはアゼルの腕を掴んだ。

「マリエルさま。アゼル様も嫌がっていますし……」

口を出した僕はマリエルに睨まれる。

「銀。誰に口を聞いているんです？」

魔法を仕えるマリエル達に”人間”の僕は勝てない。

「……申し訳ございません。」

小さくなる僕を見て笑うウォルト。

「まあまあ。2人とも。」

マリエル座って銀の話を聞いてみない？」

超平和主義のヘティーの救済でマリエルは咳払いをして僕の前に腰を下ろした。

五人の男が僕を見上げる。

「え、と……どこまで話しましたか？」

中断された話を振り返るのは結構難しい。

「悪魔なラディスラスに無理やり連れて行かれたところ。」

スウィジンの助け舟にお礼をいい、僕は咳払いをした。

「そう。」

そして僕はラディスラスと後に名が判明した方の家に住み込みでお

世話になることになったんだ。

彼女は優しいとは程遠い素晴らしい教育を僕にしてくれた…

それは語学から言葉使いまで。

当時荒い方であった僕の口調は敬語で統一された。

いつでも出て行っていくと言ってくせに、門の前には門番がいるこの屋敷に、

半ば強制的に監禁…いや…軟禁？違うな…幽閉？」

「全部同じような意味じゃね？」

言葉に詰まる僕にスウィジンが突っ込むが気にしない。

「そして十年の時間が経ちました。

当時12だった僕は22になりラディスラス様は20になられた。

僕の役目はもうすぐ終わるでしょう。」

僕は言葉に詰まった。

彼らにとつてラディスラスは組織の主。

僕とは忠誠心が違う。

行き場がなく出られない僕とは違って、彼らは自らの意思でここへ帰ってきている。

「どうして終わるの？」

ヘティーは獣のような黄色い瞳で僕を見上げた。

「僕はずっとここには居られません。」

人間だから…」

そういうと皆話が終わったと悟り立ち上がった。

「銀。ローズ様の会議の終了は？」

「三時です。」

「了解した。」

メモ帳に何か書き込んだマリエルは座ったままのアゼルを引っ張って出て行った。

「マスターの側にいられるのに…戦闘が無いだけましじゃん。」

ウォルトはヘティーにひこずられて部屋を出た。

「スウィジンさま。御退室なさらないのですか？」

「シロいなくなるのか？」

悲しいという感情は持ち合わせていないらしく、僕を見上げるスウィジン。

「出て行かなければならないんですよ。」

「あつそ。ばいばい。」

あつけなさすぎ。もう少しはいるし…

スウィジンは僕に手を振っていなくなった。

何故こんな急に過去の話をしたのかも。

別れの日がくると告げたのかも。彼らは何も聞かない。

僕が存在は常に空気で彼らには関係がないものだから。

固く弾圧なにそれ？状態のベットに寝転がった僕は天上をにらんだ。

言って見ただけ。とかそんな軽はずみなことではない。

ラディスラスから昨日言われたんだ。

『別れは近い』と。

悲しいとか寂しいとか言えない。いえるはずが無い。

だって…そうだろう？

僕は彼女のたんなるシモベ。主の命令も決定も絶対。

「…ね…しろがね！！」

怒鳴られ覚醒した。

「寝てた…の？」

まだ寝ぼけている頭を働かせ窓の外を見ると既に夜だ。

「寝ぼけるな。起きろ。」

目の前の着飾った女を見つめ、思考がうせる。

奇麗に飾られたドレスも、変わらぬ漆黒の髪も。

意思の強い瞳も全て、知っている。

「お帰りなさい。」

「何故お前は2人きりだと敬語をやめるんだ？」

「だってキ三年下…うごふ！！」

持っていた木製の鞆で殴られ言葉を遮られた。

「歳など関係ない。」

忠誠を誓うなら主に従順であれ。」

その言葉全てがこの十年で叩き込まれてきたこと。

少し疲れている目の前の女は、ベットの上に腰を下ろした。バサリと何枚か数えるのが嫌になるドレスの音がする。

「会議。お疲れ様です。」

「疲れた。肩揉め」

肩をさらす主は肩を僕に向けた。

「嫌です。」

「抵抗するのか。下僕の分際で。」

お前は一度も私に触れないな。」

髪留めを外しながら、主は言う。

確かに、僕はこういう形にしる主に触れたことが無い。主として見られないから。

「脱ぐ。」

「な！青少年が食いつきそうな話題を出すのはやめてください！！
仮にも男の部屋ですよ？何かあったらどうするつもりですか？」

髪を解いた主はドレスのファスナーに手をかけた。

「男？目の前にいるのは貧弱なガキだろ？」

「年上ですけど？」

「目をつむれ。」

「あけたらどうするんです？」

「刺す。」

「あけません。死んでも。」

ぐつと目を閉じると闇。

ファスナーのいやらしい音と、着物が落ちる音。

「今日は楽しかったか？」

開けない瞳のまま主は言う。

「何が？」

「お話あい？銀の話を聞く会をやっていたんだろ？」

「…誰からの情報です？」

「ウォルト。」

「誤解です。」

そんな会話をしているともういいぞと言われた。

「あの日のことをそんなに根に持っていたのか。」

主は僕のタンスを漁り、僕の服を着ていた。

「あの日って…一体ウォルト様は何を話したんです？」

「お前が言った話。私は悪魔に見えたんだろ？」

根に持っているのはどっちだ？

主は僕の首に手をかけた。

「キミは僕が天使にみえたんですよね？」

「十年前の事だ。忘れた。」

「なんだか思い出話も楽しいですね。」

「歳を取ったみたいでいやだぞ。」

主はグツと僕の首に力を入れた。

多少の呼吸困難は無視し、目を細める。

「出合ったあの日。あの日から僕の運命は…」

「私の手の中だったな。」

「自分で言っちゃいます？」

「今もお前の命は我が手中だぞ？」

「人殺しですね。」

そついうと主は首から手を離れた。

「会議では何を？」

布団に入ってきたので、同時に出る。

「今後のあり方？」

「誰のです？」

「私。軽率だといわれた。」

「頭の固い爺共ですね。」

「…性別を変えろといわれた。」

「性転換手術ですか。面白いですね。」

「茶化すな。笑い事じゃない。」

「手術の予定日はいつです？」

「茶化すなといっている！！」

主は差し出した紅茶を床に叩きつけた。
目が恐ろしい。

「はい。茶化していません。」

ラディスラス様。ブレインの主であるあなたは少し、
行動に責任がない。その点では僕も軽率だと思います。」

そついうと主は顔をしかめた。

「…お前は味方だと思っていたが…いかぶりすぎか…」

「味方？僕は貴方ではなく、ブレインに仕えているんですよ？」
ガタリと立ち上がった主は僕を睨んだ。

「信頼していた私が馬鹿だった。」

「お早いお気づきで。」

僕の服を勝手に着ていた主は勝手に僕の服を脱ぎ、僕の前で下着姿をさらした。

「…直ぐに感情的になるところも、軽率だと思いますが？」

服を投げつけられた。

「手術はしない。暫く話しかけるな。」

まったく。お子様だ。

止めて欲しかった？組織の上にいる人間が…考えが甘すぎる。

二十歳だからと言って許される行為にも限度がある。

主はもつと警戒するべきだ。

例えば僕に。

異性で歳も近い僕を十年も側に置くモノじゃない。

だってそうだろう？まだ温かい服と、初めてみた下着姿でこんなにも
興奮してる。

女としてしか見られない。

主人とシモベ。分かっているはずなのに。気持ちに自制が聞かない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851p/>

～ver 銀～命に変えても

2010年12月9日01時44分発行